タイトル（24 pt）

サブタイトル（14 pt）

○○　○○（16pt）

1　大見出し（10.5pt）

1·1　中見出し（9 pt）

1·1·1　小見出し（9 pt）

本文（9pt）このテンプレートは，「技術紹介」欄に投稿いただく際にご使用いただくものになります．原則として受理された原稿に基づいて組版いたします．

投稿に際し，「ぶんせき」執筆要領をご覧ください．以下に本誌の原稿作成指針を示します．

ここに示したようなフォーマットでの原稿作成が困難な場合には，編集委員会へご相談ください．

原稿を作成するにあたり，上付き・下付き，*Italic*，**Bold**などの指定は確実に行って下さい．スタイルを指定し，フォントの上付き・下付き，イタリック，ボールドの各属性を指定してください．

【技術紹介】の内容及び執筆上の注意

12000 字以内（図，表などを含む）

内容：企業や機関が保有する独自の技術や装置の特長，開発経緯，性能，応用などを科学的根拠に基づいて論じた紹介記事．会員に対して，技術や装置の導入、または、これらの利用の契機となるような情報提供を目的とする．

執筆上の注意

1. 必ずしも新規の技術や装置である必要はなく、既存の技術や装置に関わるものでもよい．社会的要求が高い内容は，データの追加などで繰り返し紹介しても構わない．
2. 製品を開発した経緯や測定法を開発する重要性など、背景を一番初めの項に記載してください．
3. 著作権が設定されている図・表、または元のま　まの文章などを利用する場合について，執筆要領の［著作権］②に基づいて適切に対応すること．
4. 保有する技術や装置の特長または性能を科学的

に説明していること．

1. 保有する技術や装置の優位性を論じるために，比較対象を否定・貶めるような表現は避けること．
2. 本文の構成要素として，「技術や装置の紹介・特長・優位性」，「その根拠となるデータ」，「考察」などが含まれていること（上記のカッコ書きは，各項の名称として求めるものではない）．
3. 専門用語は，最新の「学術用語集化学編（文部科学省）」または「分析化学用語集（日本分析化学会編）」を参照すること．
4. 製品名（商標名）は，使用しても構わない．

2　大見出し

「技術紹介」欄の原稿は本テンプレートで作成して下さい．

原則，対応の段落スタイルを適用させればよいですが，参考までに基本設定を記します．

ページの余白は以下の通りです．変更はできません．

上　20mm，下　20 mm，左　20 mm，右　20 mm

一行の文字数（2段組） 25文字

1ページの行数 49行

　　タイトル 24 pt

　　著者名 16 pt

　　大見出し 10.5 pt

　　中・小見出し 9 pt

　　本文 9 pt

　　謝辞 8 pt

　　脚注 8 pt

　　文献 8 pt

執筆要領に記載の「原稿の書き方」に基づいて注意事項を記します．

1 題 名

記事の内容を的確に示したものとし，依頼時の題名と大幅な変更のないようにする．また，普通名詞化したものを除き，原則として商品名及び略号を用いない．ただし、技術紹介記事はそのかぎりではない．

2 本 文

2·1 原稿は，原則としてテンプレートを用いて作成する．

2·2 文章は，原則として平仮名書き，平易で簡潔な文章体（「である」式）とし，常用漢字と現代仮名遣いとを用いる．

2·3 大見出し，中見出し，小見出しなどは，1, 2, ... , 1·1, 1·2, ... , 1·1·1, 1·1·2, ... , (1), (2), ... , (a), (b), ... などとし，大見出し，中見出しの前は 1 行あける．

2·4 句読点，括弧は，1 字に数え，原稿の書き始め及び行を改めたときの書き始めは，1 字あける．なお，句読点には「．」「，」を用いる．

2·5 英数文字およびギリシャ文字は半角とする．

2·6 外国の人名，会社名などは，原則としてローマ字つづりで書き，周知の術語となっている人名などは片仮名書きとする．また，欧米語は，原則としてすべて小文字とする．ただし，固有名詞は大文字で書き始め，学名はイタリック体とする．

2·7 特殊な文字，書体，記号はできるだけ避ける．また，添字の添字は特別な理由のない限り避ける．

2·8 略号は，最初に出てくる箇所で正式名称の後に ( ) に入れた略号を付記する．

2·9 脚注は，原則として用いず括弧を用いて本文中に書く．やむを得ず用いる場合は，本文中その項目の右肩に \*1 \*2 を付け，そのページの下段に書く．

2·10 引用文献がある場合は，本文中その項目の右肩に 1) 2) のように，通し番号を付け，本文の最後に文献欄を設けまとめて書く．また，引用する人名は，原則として第一著者の姓のみを記し，敬称は付けない．その他を略して「……ら」とする．欄によってはこの限りではない．

2·11 図，表及び写真を使用する場合は，図 1，表 1，写真 1 などと本文中に明記し，本文中で挿入箇所を指定する．

2·12 構造式を使用する場合は，原則として〔I〕, 〔II〕, 〔III〕などと本文中に記し，本文中で挿入箇所を指定する．

2·13 図，表，写真各 1 枚は，目安として ，片段のおおよそ三分の一、500 字相当分とする．

3 文献

3·1 原則

3·1·1 文献番号は，単一の文献に対応するものとする．

3·1·2 同一の雑誌，単行本などを連続して引用する場合に，“同上”，“ ibid. ” は使用しない．

3·1·3 カンマ、ピリオド、コロンおよびスペースは半角を用いる．

3·1·4 著者名は，全員を記載し，著者が複数となる場合には，“, ”（半角カンマ＋半角スペース）で区切る．邦字人名の場合は姓のみでなく名も記し，欧字人名の場合は名前の頭文字，姓の順に書く．

3·1·5 投稿中の論文，私信，未発表データなどは，原則として重要な資料としては用いない．

3·1·6 大学，企業および個人のWeb site の引用は極力控える．もし，引用した場合は URL のほか，Web site を作成している企業名，大学名などの情報もできるだけ記載する．また，引用したサイトを確認した最終年月日も記載する．

3·2 雑誌掲載の文献を引用する場合

3·2·1 引用の様式は，次のとおりとする．

著者: 雑誌名 (*英文名は斜体とする*) , **巻 (太字体とする)**, 開始ページ (発行年).

3·2·2 雑誌名は，Chemical Abstracts の略し方に従う．和文雑誌名は省略しない．“分析化学”及び“ぶんせき”については ( ) に入れた英文名を付記する．

1）宮川雅恵: 分析化学 (*Bunseki Kagaku*), **43**, 57 (1994).

2）片山則昭, 田村清一, 田村紘基, 古市隆三郎: 電気化学および工業物理化学, **62**, 251 (1994).

3）樋口精一郎, 島田秀樹, 田中誠之: 分析化学 (*Bunseki Kagaku*), 印刷中.

4）A. Hulanicki: *Anal. Sci*., **7** (supplement), 1405 (1991).

5）T. Tanaka, S. Kakuyama, A. Mizuike: *Anal. Sci*., **10**, 389 (1994).

6）森定雄, 森貴代: 日本分析化学会第 41 年会講演要旨集, p. 392 (1992).

7）K. Matsumoto, K. Fuwa: Abstracts of VI International Symposium on Solute-Solute-Solvent Interactions, p. 85 (1982), Osaka.

3·2·3 巻を設けていない雑誌については，発行年をもって巻に充てる．

8）小田嶋次勝: ぶんせき (*Bunseki*), **1988**, 608.

9）A. Hodinar, A. Jyo: *Chem. Lett*., **1988**, 993.

3·2·4 ページ数がない雑誌については，論文番号を記すか，論文番号がない場合には末尾にDOIを付記する．

10）S. A. Mabon, T. Misteli: *PLoS Biol.*, **3**, e374 (2005).

11）H. M. Fritz, J. C. Borrero, C. E. Synolakis, J. Yoo: *Geophys. Res. Lett*., **33** (2006). DOI: 10.1029/2006GL026784.

3·3 単行本を引用する場合

3·3·1 引用の様式は，次のとおりとする．

著者: “単行本の名称”, 第０巻, p. 引用開始ページ (発行年), (出版社，国外の出版社については所在都市名).

1）相島鐵郎: “ケモメトリックス”, p. 69 (1992), (丸善).

2）B. Magyar: “*Guide-Line to Planning Atomic Spectrometric Analysis*”, p. 63 (1982), (Elsevier Sci. Pub., Amsterdam).

3·3·2 編集者がいる場合には，その編著者名も記載する．

3）内野栄治, 都築俊文: “水の分析”, 第 4 版, 日本分析化学会北海道支部編, p. 445 (1994), (化学同人).

4）R. M. Measures: “*Analytical Laser Spectroscopy*”, Edited by N. Omenetto, p. 362 (1979), (J. Wiley & Sons, New York).

3·3·3 単行本全体を引用する場合の様式は，次のとおりとする．

編著者: “単行本の名称”, 第０巻(発行年), (出版社, 国外の出版社については所在都市名).

5）日本分析化学会北海道支部編: “水の分析”, 第 4 版, (1994), (化学同人).

6）N. Omenetto (Ed.): “*Analytical Laser Spectroscopy*”, (1979), (J. Wiley & Sons, New York).

3·3·4 翻訳書の場合は，これを引用した後，セミコロンで続けて原著書を引用する．

7）辻内順平訳: “フーリエ変換とその工学への応用”, p. 81 (1977), (共立出版); P. M. Diffieux: “*L'Integrale de Fourieret ses Applications a l'Optique*”, (1970), (Masson et Cie, Paris).

3·4 その他（特許公報，日本産業規格JIS，日本産業規格JIS，公報・告示，Web サイトなど）

3·4·1 特許に関して引用できるのは，特許出願公開番号（特開）または特許番号（特許）を取得したもののみとする．出願番号（特願）は引用文献とはしない．引用の様式は次のとおりとし，外国特許の場合は，番号の前に2文字の国名コードを追記する．

特許権者 (出願人) 1, 特許権者 (出願人) 2: 発明者1, 発明者2, 公開特許公報または特許公報の番号, “発明の名称” (年月日).

1) 産業技術総合研究所: 津越敬寿, 三島有二, 特許6649651, “質量分析方法” (2020. 1. 21).

2) 共立理化学研究所: 村居景太, 奥村浩, 岡内俊太郎, 特開2017-173018, “試料液中のヒ素の分析方法” (2017. 9. 28).

3）Dow Chemical Co.: T. M. Stevens, T. E. Miller, Jr, US 4290775, “Analytical method for determining acid/salt and base/salt species concentration in solution” (1981. 9. 22).

3·4·2 日本産業規格JIS，公報・告示，Web サイトなどを引用する場合の様式は，次のとおりとする．

4）JISK0102, 工場排水試験方法 (2019).

5）JIS G 1215-1, 鉄及び鋼−硫黄定量方法− 第1部: 鉄分離硫酸バリウム重量法 (2010).

6）ASTM E 169-63, General Techniques of Ultraviolet Quantitative Analysis (1963).

7）厚生労働省：平成15年厚生労働省告示第261号，”水質基準に関する省令の規定に基づき厚生労働大臣が定める方法” (2003).

8）国土交通省建築指導課：”ホルムアルデヒド発散建築材料の審査方法について(平成15年6月26日)” (2003).

9) 環境省: ”水銀廃棄物ガイドライン第3版(令和3年3月)” <https://www.env.go.jp/recycle/waste/mercury-disposal/>, (accessed 2022. 1. 23).

10) International Federation of Library Assoc. and Inst.: “Resources and project”, IFLANET, available from <http://www.ifla.org/II/html>, (accessed 1999. 11. 30).

11) U.S. National Library of Medicine, National Institutes of Health, Health & Human Services: “ChemID plus Advanced” <https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/>, (accessed 2021. 11. 30).

4 表

4·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，よく整理して分かりやすく書く．

4·2 脚注は， \*1 \*2 などを用いて表の下に書く．

4·3 本文原稿とは別にまとめる．

5 図，構造式

5·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，図面原稿の図の下に書き入れる．

5·2 明りょう，正確で，完全なものを作成する（やむを得ずコピーを使用する場合は，図柄中の欧米語を日本語に直す）．

5·3 図の大きさは，片段 (7.5 cm)，全段 (15 cm) 以内とし紙面に掲載のサイズでの作成が望ましい．

5·4 図柄中の記号は，なるべく簡単なものを用いる．

5·5 図の縦軸，横軸の目盛りの数値の説明は，原則として「物理量 / 単位」のように表記する．

5·6 本文原稿とは別にまとめる．

6 写真

6·1 表題，説明などは，すべて日本語とし，写真の下に書き入れる．

6·2 白黒で，コントラストの鮮明なものが望ましい．

6·3 本文原稿とは別にまとめる．

7 専門用語

最新の “学術用語集化学編”（文部省）または “分析化学用語集”（日本分析化学会編）参照．

8 化合物名

8·1 原則として IUPAC 命名法に従い日本語で書く．ただし，誤解のおそれがなく，理解しやすい場合には，元素記号，化学式を用いても差し支えないが，その際は一原稿中で統一する．

8·2 最新の “化合物命名法” (日本化学会標準化専門委員会化合物命名小委員会編) 参照．

9 物理量の記号，単位，数と数式

9·1 物理量の記号及びその使用上の規約は，なるべく IUPAC の勧告に従い，慣用のものでも最初に出てくる箇所でその定義を明示する．

9·2 単位は，できるかぎり国際単位系 (SI) を用いる．

9·3 数式は，本文文章中では (a+b)/(c+d) のように書く．ただし，式だけを別行に書く場合は，

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

のような記載も可能とする．

9·4 物理量，単位，数及び数式については，最新の “「分析化学」投稿の手引き付記 A2 及びA3”（毎年本誌 3 号に掲載）並びに “「物理・化学量及び単位」に関する記号と術語の手引”（日本化学会標準化専門委員会編）を参照．

お写真

左右28mm×天地34mm

**会社ホームページURL：**

**関連製品ページURL：**

図表配置ページ図表配置ページ

図表は本文とは別ファイルで提出して下さい．

片段の場合の横幅は**82mm**



Fig.1 タイトル（ピリオドなしで改行）9pt

9pt 説明文□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆

全段の場合の横幅は**170mm**

最大の高さは**246mm**

1ページ大に横倒しで配置する場合は，横幅**246mm**，高さを**170mm**とします．

上記サイズは全てキャプション込みの数値です．

写真や図でカラー掲載を前提としない場合はグレースケールで作成してください．

上記サイズに則り，原寸で作成してください．

できるだけ高解像度（刷り上がり寸法で，カラー図 300ppi, モノクロ図 600ppi, ラインアート1200ppi 以上）の状態でご投稿ください。

他ソフトウェアで作成された図を貼り込み，拡大縮小が必要な場合は注意が必要です．組版時に図のサイズを調整すると，図がぼやける原因になります。必ず印刷に適した解像度で，プリントサイズが十分なもの（方段幅 8cm, 段通し 17cm 以内）をご提出願います。

カラー画像で入稿し，グレースケールで印刷する場合：

画像を処理する際に多く見受けられるのが，見た目はグレースケールでもデータ上はRGBやCMYKの場合がございます．

このような場合は強制的にグレースケールへと変換されます．

また，見た目が鮮やかなカラー画像をグレースケールで運用する場合，色の組み合わせによっては隣接色との識別が困難な場合があります．

そのようなトラブルを未然に防ぐためにも，予めグレースケールでの運用をお願いいたします．